

スリズマティック・バド
七色彩蕾



香椎 愛莉



1

「あのっ…長谷川さん
今日はありがとうございました」

「愛莉」そお疲れさま。
お礼なんて必要ないよ、
愛莉が頼ってくれるなら
オレも嬉しいから。」

「あっ…はい♪
えへへ…」

2

今日は愛莉と二人、
体育館でテイフェンスの
練習—。努力家の愛莉との練習は、
オレにとっても身になる
部分は多い。

3

「はふ…でもやっぱりちょっと
疲れちゃいました★」

はにかみながら床に
身体を預ける愛莉。
…何気なく支えるように
腕を形作るのはやはり—
重いのだろうか？



1

「…長谷川さん？
どこを見て—
…っ!？」
年齢にそぐわない
立派な胸を抱え込む
ように腕を組む愛莉。
…しまった、思わず凝視
してしまった。

2

「……」
「いや違うんだ—
」レはその…さっき
ぶつかったところは
大丈夫かな…
つて思つて!」

3

黙り込んでしまった
愛莉に慌てて言い繕う。
実際、ゴール下での
攻防の折に肘をぶつけて
しまったのだ。
…こちらにはダメージ
でなく幸福感が残った。



1 「あ…そ、そうですか…
はい、大丈夫ですよ？
えへへ…」

そう言つて平気なのを
誇示するかのよう
大きく揺らす。
…わざとじゃないよなあ★

2 愛莉にとつて大きな胸は
コンプレックスのひとつ
なのだが——
男として思うことは
「もつたいない」の
一語に尽きる。
「え…と…
は、長谷川…さん？
そ、そんなに心配
ですか？」

3 はたと我に還る。
いかん、また凝視
してたらしい★
申し訳ない気持ちで
いっばいになった。
「だったら——直に
確かめて…みますか？」

1 愛莉が何を言っているのか理解する前に、体操着の白い布地がおすおすと捲りあげられた。

2 「え、えへへー
ほら…なんとも
なっていないでしょ？」
いつものほにかみも、
赤く染まった頬のせいで
妙に艶かしく見える。
これは——なんだろう。
思考が追いつかなく
なってきた★





1
「も…もう少し
ちゃんと見せて
もらっても…いいわー」
「え…あの…
いいです…けど…」

2
戸惑いを滲ませながら
承諾してくれる愛莉。
——たしかに、痣に
なったりしてる部分は
見当たらない。

3
「は…長谷川さん…
ち…近い…です。
い…息が当たって…っ」
愛莉が悩ましげな
声を漏らす。
こちらの意図は
ただ漏れのような
気もするが—
嫌がつて…ないよな？



2

「…ほ、本当…
ですか…?」
そんなオレの努力を
無にするように
潤んだ瞳の愛莉が
訴えかける。

1

「…うん、特に違和感
無いみたいだし、
愛莉が平気なら
大丈夫じゃないかな。」
——いかげん理性を
取り戻す時だと感じたオレは、
無理やり普段通りの
口調に戻してそう告げた。

3

「長谷川さんさえ
よければ…もつと、
ちゃんと調べて
くれませんか…?」

1
…そして今、目の前に
O学生にあるまじき
豊満な胸が晒されていた。
—ああ…やわらかそう…♪
「…どうぞ…長谷川さん…♡」

2
「あ…愛莉…?」
男として当然のように
目を奪われながら、
頭の中は大半が
クエスチョンマーク。
「お…男の人は
大きい胸が好きって
よく聞くから…
長谷川さんも私の胸を
好きになってくれたら…
私の中で何か変わる
かな…って思ってた…★」

3
—そうか。
愛莉は愛莉で
コンプレックスを克服
しようと努力してるのか…。
その相手としてオレを
選んでくれるというのは
この上なく光栄なことだ
「ん…わかった、愛莉。
…イヤだったらちゃんと
言っただよっ」
「…長谷川さんなら…
長谷川さんだから…
イヤじゃないです…♡」



1

外気に晒され、
心なし肌寒そうに
震える大きな胸に、
ゆつくりと手を
伸ばす――

2

「……」
軽く息を飲む愛莉。
――無理もない、
ひなたちゃん達なら
ともかく、男に
触れられるのは
初めてのことだろう。



1

それでも——
心を鬼にして(?)
両側から包み込むように
優しく手を添える。

2

「……あ……♡」
——愛莉の口から
艶かしい吐息が
漏れた。



2

感動のあまり
思わず声が出た。
愛莉の顔がさらに
赤味を帯びる。
しまった、さすがに
無神経だったか★

1

「うわ……すげえ
やわらかい……っ☆」
「ほ……ほ……っ☆」

3

「……うめん……っ！
……その……愛莉は、
やっぱりこの胸が
キレイ……っ」
謝りながらも——
少し待って、そう
問いかけてみた。



2
背丈を指摘した
だけで泣いていた
あの愛莉が
それを誇れるように
なるくらい精神的にも
成長を遂げていた。

1
「以前は…他のみんなと違う
この身体の全部がイヤでした…。
でも今は、この背の高さのおかげで
みんなの力になれるのが、
すこく…嬉しいです。」

3
「ただ…この胸はまだ…
時々でもやっぱり、
その…え、えつちな目で
見られたりするし…」
「…面目も…ありません。」
…平謝り★
どう考えても
そのうちの一人であった。
コーチ失格である。



2

「…おや…
これは…素直に
喜んでいい告白
—なのでは…?」

1

「あ、えと、だから、
は…長谷川さんにそう
見られるのは…イヤじゃ
なくてその…そう、
へんにドキドキして…」

3

「…長谷川さんが
この胸を好きだつて
言ってくれたら…私も、
好きになれるのかも…
つて…え、えへへ…♡」
いつものように
はにかむ愛莉。
これは…最大限の
誠意をもって
答えなくては—



1
「—うん…
好きだよ愛莉。」
「…はわ…っ!?」

2
「オレにとって愛莉の胸は、
キレイで、やわらかくて、
この上なく魅力的に
思える——って愛莉…?」
…なにか反応がおかしい…
オレへんなこと言ったかな?

3
「ええ…は、はい
む…胸の話ですよ…
私ったら…えへ…☆」
「…」
少し残念そうな
素振りを見せて、
やっぱりいつものように
はにかんだ。



2
桜色の頂に親指を添えて、優しくしかし強めにこね回してみた。
「あ…っや…そんな…先っぽ触っちゃ」

1
気を取り直して、今度ははつきり愛撫をするように手を動かす。
「…っん…は…あ…ん♡」

3
「…っやっ」
「は…は…っ…♡」
ひなたちゃん達もさすがにこういう触れ方はしないだろうから、戸惑っているのだろう—というか、
「…っやっ」
「は…は…っ…♡」
感じて…のかな？



1 「愛莉…ひょひょん
気持ちいい…」

2 こはる…
わ、わかりません
…ひなちゃん達に
触られても
くすぐりたいだけ
なんですけど、
は…長谷川さんに
触れられると、その
…なんだか電気が
走つたみたいに…★

3 そのまま真っ赤に
なつて黙り込む。
むう…いっそのまま
抱きすくめてしまいたい。



1 「いあ…!?
あつ…は…
長谷川さん…っ?」

2 拒否されるのを
覚悟しつつ、
乳首に顔を近づけて
その頂に舌を
伸ばしてみた。

3 「んあ…そ、そんなとこ
舐める…なんて…
はうん…っ♡」
甲高い喘ぎが響く。
…どうやらイヤがつては
いないようだ—
愛莉つて実はけっこう
感度いいのかも…。



2
先づばを舌で舐めるたびに、愛莉の漏らす甘い声が脳を刺激する。

1
「あは…っん…いあ…
あ…んああん…っ♡」



1

両の手で豊満な胸を弄びながら桜色の乳首を口に含み、ちゅうちゅと音を立てて吸い上げる。

2

「ふあは…うあ…♡
はせ…がわさん…
赤ちゃんみたい
…です…♡」
心なしか
楽しそうな声で
そう言つと、
愛莉の両手が
驚くほど優しく
オレの身体を
包んだ。



1
「んあ…は…あつ
…ああん…っ♡」

2
食べるように
乳首を舐め、吸い、
それに伴って愛莉の
喘ぎはいつそう
激しくなる。



2 「んは…っ…っ…っ…
はわ…あ…
ああん…っ!!!」

1 自在に形を
変える大きな胸を
少し強めにこね回し、
口に含んだ乳首に
軽く歯を立てた
その時—

3 愛莉の身体が
弓形に反り返り、
ひときわ高い
喘ぎがほとばしった。

1

「っはっはっはあっ♡」
「愛莉…イッちゃったのか…?」

急速に虚脱した
愛莉の身体を
支えながら、
耳元で問いかけた。

「ふあ…?」
「イ…く…つて…」
「なん…ですか…?」

2

焦点の定まらない
眼差しで首を傾げる。
どうやら「イく」と
いう感覚を認識
していないようだ。

3

「胸だけでいくなんて…
実は愛莉ってけっこう
えづちな娘なんじゃあ—」
「…は…っ?」
「ははわわ…っ!」

…しまった、
ひとりごちた
つもりが愛莉の耳に
届いてたらしい。
顔を真っ赤にして
うろたえる姿が—
たまらなく可愛い。

4

「わ…っ 私になか…
は、はしたないこと
しちゃいましたかっ!」

1
「い…いやいや…
そんなことはないぞ!!
むしろ愛らしすぎますます
好きになっちゃったくらいだー」
涙目の愛莉を優しく抱きすくめる。

——落ち着くのを
見計らい、あらためて
耳元でささやいた。

2
「…うん、ごういう
言い方はなんだけど…
その胸も含めて全部が
愛莉の魅力なんだから
…オレは、愛莉が
大好きだよ」

3
「長谷川さん…
ありがとうございます
ございます…♡
えへへ…」
…そう、
いつものように
はにかんだ笑顔が、
愛莉を心から
愛おしく感じさせる
——それは決して
この場限りの方便
などではありえない。

「えー…
と、言っわけでー…」
「は…はい、あの…
これから何を…?」

1

場所を移して体育倉庫。
マットの上には
上半身ハダカになった
愛莉が戸惑い気味に
寝そべっていた。

「うん、愛莉のおっぱいは
たまらなく魅力的だと
いつところに落ちて着いた
んだけどー」

2

「…オッのほっはオッのほっで
治まらなくなっちゃって…★」
「治まらなく…」

3

「あ…あの…それって、
男の人がえづちな気分にな
ったらおっきくなる
って言うっー」

4

バツの悪い思いを
しながら、股間に張った
テントを指し示す。
それに思い至った愛莉が、
顔を赤らめながら問う。

「そう、いわゆる
『おちんちん』です。」
…あ、真っ赤に
なって俯いた。
「うん、愛莉は
可愛いなあ♪」

5



1 「…え…と、そ…それって
どうすれば治められる
んでしょうか…？」
「うん、いい質問だね
愛莉くん☆」

3 「せうかください、
愛莉の大きな胸
だからこそ出来る
ことを教えて
あげようと思って」
「え…じゃあ—
私がそれを鎮めて
あげられるん
ですか…？」

2 股間を勃起させながら
得意げに振舞うバカ一人。
—オレなら絶対
トモダチにはならない★

4 「もちろんだよ。
…愛莉、お願いしても
いいかな？」
「は、はいっ、
私でできることなら
何なりと…っ！」

1

愛莉の承諾を得たので
—変に勿体ぶらず、
硬く張ったペニスを
曝け出す。

「ひんげい」

2

なんとも可愛らしい
悲鳴が上がった。
…うん、女の子だったら
驚く…んだらうなあ。

「お…お兄ちゃん
の…お…」

3

そつちで驚いてるのか!?
ま、まさか万里のやつ、
妹相手に妙なこと
やつてるんじゃないか—
(→教子相手—
妙ナコトヤツテルヤツン
台詞ジャンナイヨネw)

「…あ、そ…そうが、
お兄ちゃんのは
おつきくなつて
ないから—」

4

…どつやら以前に
お風呂とかで見たのを
引き合いに出した
というところか…
疑つてすまん、万里★



1

「…愛莉、オレのが
こんなに大きく
なってるのは、愛莉が
とても魅力的だから
なんだよ?」

「わ…わたし—
魅力的…ですか?」

「ああ…オレなんかの言葉で
表現するのもただけど
愛莉はすごく可愛い
女の子だよ」

2

「…いいえ…?
長谷川さんにそう
言ってもらえるのが、
一番嬉しいです…うん」
年相応の愛らしさで
微笑む愛莉の中に、
女の艶やかさを含んだ
蕾が垣間見えた
気がした—。

3

「…えと…
それで私は、
どうすれば
いいですか…?」

「あ、うん…
それじゃ
失礼して—」

4

1

両腕で寄せてもらった胸の谷間にペニスを潜り込ませる。先走りのおかげで思いのほかスムーズに入った。

「……うあ……はあ……う！」

3

意外だったのか、谷間に挿入されたことよりも、オレが声を上げたことに驚いてる様子の愛莉。

「そりゃ……まあ、愛莉の胸が気持ちよすぎて……さ★そのへんは男も女も変わらないよ？」

2

愛莉の谷間の感触が絶妙すぎて、思わず声を上げてしまった。

「……お、男の人……えっちな声、出すんですね……？」

4

「わ……私のおっぱい……気持ちいい……ですか？えへへ……」

なんだか嬉しそうにはにかむ愛莉だった。

——抵抗は無い。みたいでひと安心だ。



1

「じゃ…動くよ…？」
「苦しかったら言ってみてね？」
「は…はい…っ…」
「お任せします…っ…」

2

ゆつくりと、谷間を
往復させる——この世のもの
とも思えない暖かさ
柔らかさに包まれ、
気持ちいいこの上ない。

3

最初は興味深そうに
自分の胸の間を
出たり入ったりする
ペニスを眺めていた
愛莉だったが、次第に
吐息が荒くなつて
いくのが判った。

「ん…ん…
はうん…♡」

1 「はっ…っあん…っ
いあ…っうんっ…っ♡」

すっかり甘やかな
声を出すように
なつてしまつた愛莉。
とろんと潤んだ瞳が
— 実にエロいw

2 「はわ…また…おつきなつて…
は、長谷川さんのおちんちん…
すっごく…熱い…です…っ♡」

3 「うん…っ♡
愛莉のおっぱいも…
あつたかくて、
やわらかくて—
最高に気持ち
いい…っ♡」

いっしょに抽送の
速度も上がり、
胸元は汗と先走り
でべとべとになつて
いた。

1 「ふぁ…んっ…あ…
はっ…ああん…っ♡」

手を添えて愛莉の胸を
愛撫しながら、腰の動きは
速くなるばかりだ—
それに併せて愛莉の
喘ぎも高まっていく。

やはり愛莉は感度が
良いらしい。
さっきは自覚して
なかつた快感を今は、
微かに不安の交じった
表情で訴えかける。

3

「ああ…オレもだよ
愛莉…今度は、
いっしょにイこう…なよ」

「はっ…は、はい…
お願いします…っ♡」

同じ感覚を共有していると
知って、不安顔が一転、
嬉しそうな表情に変わる—
それだけでもう…爆発寸前
まで昇りつめた。

4

2 「は…はせがわ…さん…っ♡
私…わたしました…なんだか
身体がふわ…ってなっ…っ♡」



「……ん……ん……ん」

「んんん……んんん」

「あああん……♡」

1

2

絶頂に導かれるまま
 白濁した欲望を
 解き放つ――

戸惑いの声に続いて
 愛莉の高い喘ぎ声
 が響いた。

1 「うん…うん…
はう…はう…♡」

2 「うん…うん…
うん…愛莉…うん…」

3 我に還つて愛莉を見ると
口の中まで精液まみれ
になつていた—
それをよそに未だ
少量ながら白濁液を
吐き出す我が息子。
おのれは…★

4 「…これって、
赤ちゃんの素…？
…変わった味、
ですね…★」
特に嫌悪感も
無いようで
素直に味わつた
感想を漏らす。
…いやいや純粋にも
程があるだろう—
…ああもう可愛いな♡

1
「こめん、愛莉…
べとべとに
なっちゃったな★」

2
「あ…だ、
だいじょうぶですよ？
…ちまことひつくり
しちやっただと—
それよりも…」
軽く息をつき、
流れ落ちる精液を
気にも留めずに、
愛莉はいつものように
はにかんで—

3
「長谷川さんと…
ちゃんといっしょに…
「イけ」ました♡
…すく…
うれしかった♡
…えへへっ♪」

結局——二人ともに
昂った気持ちは治まらず、
愛莉も望んでくれたので
最後まで続けることになった。

1

「ふう…ですか？
…ちよごと…
恥かしい…です★」

2

倉庫の壁に手をつき、
愛莉がお尻をこちらに
向ける——
性徴著しい身体は、
年齢に似合わない色気
を醸し出していた。

「ふうん、愛莉は
色っぽいなあよ」

3

「…それって、大人の
女の人に言う言
葉ですよね…
あんまり
嬉しくない…かも」

4
珍しく不満を滲ませる愛莉。
他の女の子からすると
贅沢な悩みかもしれない。

5

「ごめんごめん…
褒め言葉には
違くないから
赦してくれると
嬉しい。
…それに——」

2

「は、はわわ…う!?
わ、私ひきよとして
お漏らししちゃい
ましたか…?」
さつきからおまたが
へんな感じだったんで
まさかとは思ってた
んですけど…う☆」

「は…は…
で…でも…」
「オレのだからって
さつき挟んだ時に
ぬるぬるしてただろ?
あれと同じだから!
お漏らししたわけ
じゃないよ!」

4

「いいいや!」
お漏らしじゃないよ!
これはエッチな気持ちに
なったら誰だって
出てくるものだから!

3

涙目になった愛莉に
あわてて弁明する。

1

「スパッツにこんな
大きな染みを
作ってるあたり、
あながち子供って
わけでもないし…」
少し意地の悪い
含み笑いを漏らす。
——愛莉の大事な
部分はすっかり
濡れそぼっていた。

「はう…そ…
そつえば—
よ…よかつた…
お漏らしした
なんて恥かしくて
長谷川さんに
言えない…☆」
スパッツが濡れてる
のを指摘したのは
オレなんだが、色々と
こんがらがってるらしい。
——うむ、やはり
「色っぽい」よりは
「可愛い」がしっくり
来るな☆

5

「—そんなに心配なら、
オレがキレイにしてあげるよ☆」
「はっ…ひゃん…っ!!」

1

2
返事を待たずに、
優しく、しかし素早く
スパッツを引き下げる。

3
「はわわ…
は、恥かしいです
長谷川さん…っ☆」
外気に晒された
下半身が寒そうに
震える…うつわ、
愛莉のアソコから
スパッツに糸ひいて
—すっげえエロいわ





2

「んあ…ひ…っ
…ひいん…♡」

ふくらんで顔を
覗かせたクリトリスを、
軽くひつかくように
指で愛撫する——
その度に、愛莉が
甲高い喘ぎを上げた。

1

「ひうん…っ!?
ふあ…や…
そんなとこ…っ」
思わず生唾を
飲み込み、
無言で愛莉の
アソコに指を
伸ばしてみた。



2

少し指の動きを
止めて愛莉を伺うと、
蕩けたような瞳で
深い吐息を繰り返す。
—嫌がっては
…いないよな？

「んん…んん…」
「♡…んんん…」
1



2

止まってしまった
愛撫を訝しむ様に、
肩越しに流し目を
送ってくる愛莉。
——いや待てその
表情は反則だろう!?

「は…
はせがわ…
さん…?」
1



2
恥かしげな
声が漏れるが、
特に嫌がる
素振りは見せない。
…全てをオレに
任せてくれる
ようだ。

1
両の手の親指で
ゆっくりと愛莉の
恥丘を押し広げる。
「…んんんんんんんん」
♡



2
「あ…っはん…っ…
くう…いわああ…っ♡」
軽く舌を差し入れ、
肉芽を転がす度に
妖艶さを伴った
高い喘ぎが上がる。

「ふあは…っ…
あ…んああ…あ♡」
「キレイにしてあげる」
という最初の言を
守るため、
愛莉の入り口を
舌で舐め上げた。
1

2

「…じめん愛莉
——じちもガマンの
限界だよ…★」

とめどなく溢れる愛液を
舐め取ったところで、
愛撫を止めて立ち上がる。

1





2
「はい……♡
来て……ください、
長谷川さん……♡」

1
ガチガチに反り返った
肉棒を指し示すと、
蕩けきつた女の表情で
愛莉は頷いた。



2

軽く息を呑む
愛莉の声で
我に還り——
改めて気持ちを
落ち着かせて。

「だいじょうぶ……
できるだけ優しく
するから——
まかせて愛莉。」
「は……は……♡」

逸る気持ちを
抑えながら
ゆつくりと、
愛莉の入り口に
ペスを宛がう——
「……」

1



1 背中を優しく抱きとめ、
愛莉が安堵の表情を
見せたところで——
ぐつと腰を押し進めた。

2 「んっ……んっ……」
眉根がぎゅつと
寄せられ、
その痛みを切実に
訴える。

3 「……はっ……
んはあっ☆△」
深く吐息を
繰り返し、
痛みを耐える
愛莉——
目尻から滲む
涙が痛々しい。



4
その言葉を聞いたオレは、
いっそう強く、愛莉を
抱きしめるのだった。

2
「—ありがとう、愛莉。
最後までガマンしてくれて。」
オレの肉棒は、今や
すっかり愛莉の暖かさに
包まれていた。

1
「は……は……
うあ……はあ……」
次第に息の
荒さが消え、
幾分か穏やかな
呼吸を繰り返す
ようになった。

3
「ごめんな、
痛かったら？
…愛莉は強いな」
「そ、そんな…
は、長谷川さんが
ずっと優しく
抱きしめてて
くれたから…
え、えへへ…♡」



「ふひゃあぁあ…
んっ…ふぁあ…♡」

「だいじょうぶ」と言う
愛莉を信じてゆめくろと
腰を動かすと…思いのほか
甘い喘ぎ声が聞こえた。

2
「愛莉…?
痛くない…?」

「はい…長谷川さん
が入ってきた時は
痛かったんですが…
今はそんなに…
えと、痛い、と
いうより—」

「—気持ちいい?」
「は…はい…♡」

消え入るような声で
顔を真っ赤にする愛莉。
はっはっは、こいつめ、
オレを萌え殺すつもり
だなあ?↑バカ

3

1



2

「ば…ん…ん…
あ…ん…ん…
あ…ん…ん…♡」

リズムカルに
抽送を繰り返すと
それに合わせて
歌うように、
高い喘ぎが上がる。

それならばと——
腰の律動を速くして、
素直に快感を味わわせて
もらおうとする。

1

3

「あ…う…ふあ
…や…ん…ん…
あ…ん…ん…♡」

悦びの入り
交じた喘ぎが
脳天を刺激して、
興奮は高まる
ばかりだ。

1 「わあ……あ……♡
はぁん……♡
は、はせがわ……
さぁん……♡」

2 当初よりも強めに
愛莉を突きながら、
背中越しでもはきりと
暴れまわるたわわな胸を
驚掴みにした。

「はう……ん♡
おっぱい……♡
気持ちいです……♡
もっ……もっ♡
触ってください……♡」
強すぎず弱すぎず、
我ながら絶妙な
感覚で二つの乳房を
揉み、時に先っぽを
摘むように愛撫する。

3



2 「ああ…愛莉…
おっぱいも…愛莉の
なにもかも全部…う
大好きだよ…っ！」

1 「あう…ふあ…♡
んあ…っはあん…っ
は…はせがわさん…う
…私のおっぱい…
好き…ですか…っ？」

3 「はわ…っ♡
はう…っ…！
嬉しいですよ…っ♡
長谷川さん…っ♡
はせがわさん…っ♡」
名前を繰り返す
愛莉の甘い声が、
急激にオレを絶頂へと
導いていった—



2
——ひと際高く迸った
愛莉の喘ぎとともに、
繋がったままで欲望を
解き放った。

「ふふふ……♡」
「ふふふ……♡」
1



2
留まるところを
知らないように、
どくどくと精液が
愛莉に注がれる。

「あぁ……んん」
「あぁ……んん……
んん……んん……
んん……んん……」
1

「あぁ……
すこい……♡
お腹の中が、
あつたかいので
いっぱいになって
ます……♡」
3

1

「こい、ごめん愛莉…
そのまま出しちゃって
…平気だった？」
謝ったところで
後の祭りである。

3

失礼だがちよと
意外だった。
「私って、やっぱり
生理を迎えるのが
早かったから、
お母さんがちゃんと
知っておきなさい…って」
…なるほど、さすがは
スポーツ一家、きつと
健康管理の面でも
ほぼ完璧な指導を
されてるに違いない

2

「えと…はい…今日は
大丈夫な日だったはず
なので…平気ですよ♡
えへへ…」
「…そっか…愛莉って、
ちゃんとそいつの日付とか
理解してるんだね？」

4

「こないだお兄ちゃんに
知られそうになった
時にはさすがに
慌てちゃいましたけど…
えへへ…★」
—そしてオレは、
プリズンメイクハド
「七色彩蕾」が持つ
可能性を少なからず
侵してしまったことを…
絶対に万里にだけは
知られてはならない